

ベートーヴェンへの旅 vol.2

ひとりひとりの人生がかけがえのないものであることに
ベートーヴェンの音楽は気づかせてくれます。

神戸大学大学院教授 / 音楽評論家

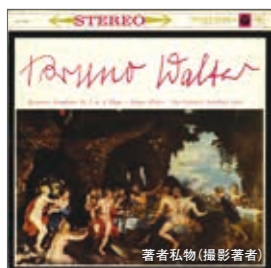
藤野 一夫

「ベートーヴェンへの旅」の始まり

今回は個人的な思い出が多くなることをお許しください。まずは、わたしにとっての「ベートーヴェンへの旅」を語りたいと思います。それによって、ベートーヴェンの偉大な音楽をいっそう身近に感じ取ってもらえればと願っています。「だれもが生きるに値する大切なもの」をもって生まれてきました。無駄な人生などひとつもありません。ひとりひとりの人生がかけがえのないものであることに、ベートーヴェンの音楽は気づかせてくれます。

ベートーヴェンとの最初の出会いは偶然でした。まだ小学生の頃、父親がなぜか「NHKみんなのうた」のレコードと一緒に、ベートーヴェンの交響曲第7番(通称「ベト7」)のLPを買ってきたのです。わたしには「みんなのうた」を、自分のために「ベト7」を、ということだったので。わが家は職住一体の商人で、それまでクラシック音楽とは無縁でした。演歌や歌謡曲に囲まれて育ち、加山雄三に憧れていた時期も。すでに世はビートルズ・ブームでしたが、それにはなじめない自分がいました。

「ベト7」のLPはブルーノ・ワルター指揮、コロムビア交響楽団。



『ベートーヴェン:交響曲第7番長調 Op.92』
ブルーノ・ワルター(指揮)
コロムビア交響楽団
COLUMBIA
著者私物(撮影著者)

解説には詳しい楽曲分析があり、興味津々。「みんなのうた」は長くて3分なのに、「ベト7」は4楽章合わせて40分。ところが、重厚長大な交響曲が織りなすダイナミックな音楽の宇宙に、たちまち魂を奪われてしまったのです。目の前には商人の後継としてのレールが敷かれていました。高度成長期の都会の商店街で育ち、そこに根を張りながらも「油を売って」生業を立て、一生を送ることに息苦しさを感じていた。家業は文字通り油屋でしたが、油を売れるほどの商人気質には恵まれず、太宰治や坂口安吾にかぶれるありさま。知的無頼漢です。

役得というべきか、よいこともありました。家業の手伝いは子どものころから当たり前。大手レコード会社の社長のお抱え運転手さんがよく給油に立ち寄り、業界の話などを聞かせてくれました。ときどき「坊や、好きなレコードあげるから」と。車のトランクを開けると段ボールにクラシックの見本版LPがぎっしり。「ベト7」から

入門したわたしは、まずはベートーヴェンを中心にドイツ音楽を涉猟。お年玉とバイト料も半端なくつぎ込みました。このような偶然が重なって「ベートーヴェンへの旅」が始まったのです。

とはいえ自分の周囲では、クラシックかぶれの小学生など奇人・変人あつかい。話のできる友人もなく孤独で、ビートルズのよさが分からずコンプレックスの塊に。家にはステレオもなかった。ちっぽけな蓄音機を押し入れに持ち込んで、真っ暗な中に引きこもって聴いていました。ベートーヴェンやシューマンを繰り返し聴いていると、貧しい音質なのに、その音楽が無限の想像力をかき立ててくれた。押し入れの中から精神の翼が時間と空間をトランスして、200年前のドイツへと羽ばたいていったのです。こんなにも壮絶で崇高で優美な音楽が生まれたドイツやウィーンは、いったいどんなところなのだろう？好奇心と慰め。特異気質ゆえの孤独な魂が浄化されてゆく。ベートーヴェンに救われました。

まだ見ぬドイツへの憧れ。初めてヨーロッパを訪れたのは22歳のときですから、10年以上も日本にいながらベートーヴェンに導かれ、その音楽を心の糧に、ドイツの芸術と哲学への傾倒を強めてゆきました。

そして、わたしの「ベートーヴェンへの旅」は、あるエポックを迎えます。大学時代にドイツ哲学を専攻するかたわら、最高の「第九」を歌いたい一念で武蔵野合唱団の門をたたきました。指導者はブダペストの国際指揮者コンクールで優勝し、世界中のオーケストラにデビューを果たした「コバケン」こと小林研一郎先生。最高の夢が現実となりました。初舞台は1978年12月、東京都交響楽団との共演で会場は東京文化会館。そのときの感激は筆舌に尽くせません。なにしろ中学生の頃から日本フィルや東京フィルの定期会員として数百回通いつめたクラシックの殿堂で、世界のコバケンと「共演」したのです！

その後も数え切れないほどコバケンの「第九」を歌い、完全に中毒になってしまった。他の指揮者でも何度か「第九」を歌う機会がありましたが、いつも不完全燃焼。初めに「最高」を知ってしまったがゆえの不幸です。入団からしばらくして、幸運にも武蔵野合唱団のハンガリー演奏旅行が企画されました。1980年8月、楽聖とゆかりの深いマルトンヴァシャーレ(ブダペスト近郊)のベートーヴェン・パークで、コバケン指揮のハンガリー国立交響楽団ならびに国立合唱団と「第九」を共演しました。



ハンガリー演奏旅行にて(著者は最前列、右から3番目)

ベートーヴェンは1799年来、この地の伯爵の令嬢姉妹にウィーンでピアノを教えていたのですが、1806年にはマルトンヴァシャーレを訪ね、姉妹のどちらかと会っていた可能性があります。「不滅の恋人」のリストに登場するテレゼとヨゼフィーネです。真相はいまだに謎に包まれているのですが。

難聴を抱えながらも創造力が充溢した中期の「傑作の森」

さて、ベートーヴェン・チクルス第1回は交響曲第4番と第5番、その間にピアノ協奏曲第5番が演奏されるという豪華プログラム。演奏者も実力派ぞろいです。これらの3曲は1806年から1809年にかけて作曲され、30代後半のベートーヴェンの類い稀な個性が炸裂しています。難聴を抱えながらも創造力が充溢した中期の「傑作の森」です。

シューマンは交響曲第4番を「北国の2人の巨人(「英雄」と「運命」)に挟まれた清楚で可憐なギリシャの乙女」と呼びました。わたしもやや慎ましやかな印象を持っていましたが、カルロス・クライバーの演奏を聴いて腰が抜けてしまった。アポロンが酒神ディオニュソスに変貌し、その凄まじい推進力を弾力性にとむ天才のセンスが彩る。1982年のバイエルン国立歌劇場管とのライブ録音です。翌年のアムステルダム・コンセルトヘボウ管とのライブはDVDになっています。カルロス様はエロスの化身。その魔法に恍惚となるでしょう。



『ベートーヴェン:交響曲第4番変ロ長調 Op.60』
カルロス・クライバー(指揮)
バイエルン国立歌劇場管
1982年ステレオ録音
ORFEO
著者私物(撮影著者)



『ベートーヴェン:交響曲第4番変ロ長調 Op.60』
カルロス・クライバー(指揮)
アムステルダム・コンセルトヘボウ管
1983年
DECCA
著者私物(撮影著者)

ピアノ協奏曲第5番は名演が目白押しですが、わたしの秘蔵盤はエミール・ギレリスとユーリー・エゴロフ。ギレリスはジョージ・セル指揮=クリーヴランド管との1968年録音がベストです。にじみのない楷書体で緻密な作品構造が立体的に浮かび上がる強靱無比な演奏。一方、エイズで夭折したエゴロフのアプローチは、ギレリスの「鋼」に対して「柔」なのですが、限りなく澄みきった音色が絶対的な美の世界へ昇華される。フェルメールの絵画のように。サヴァリッシュ指揮=フィルハーモニア管のサポートも精妙で明晰です。



『ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 皇帝』
エミール・ギレリス(ピアノ)
ジョージ・セル(指揮)
クリーヴランド管
1968年ステレオ録音
EMI
著者私物(撮影著者)



『ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 皇帝』
ユーリー・エゴロフ(ピアノ)
ヴォルフガング・サヴァリッシュ(指揮)
フィルハーモニア管
1985年ステレオ録音
EMI
著者私物(撮影著者)

交響曲第5番は、神がかった気迫においてフルトヴェングラーに屈します。数多い同曲の録音の中から選ぶとしたら、終戦後初めてベルリン・フィルとの舞台上に立った日の演奏。1947年5月25日、映画館ティタニア・パラストでのライブです。このときベルリン中心部のフィルハーモニーは瓦礫となり、焼け残った市域の映画館で



1947年5月25日「ティタニア・パラスト」

のコンサートを求めて、多くの聴衆がなげなしの家財道具を売ってチケットを入手したといえます。ティタニア・パラストは、わたしが毎年ベルリンで過ごすアパートの近くに今も残っています。



現在の「ティタニア・パラスト」



藤野 一夫 プロフィール

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化学専攻教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー、文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖ホール理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、日本ワーグナー協会理事他。専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に「ワーグナー 友人たちへの伝言」(法政大学出版局)、「公共文化施設の公共性」(水曜社)、「行政改革と文化創造のイニシアティブ」(美学出版)、「地域主権の国ドイツの文化政策」(美学出版)。日経新聞等の音楽批評を担当。